



Book Talk



編集・発行
第22号

海南高校図書館
2014.11.21

「趣味：読書」と書けるようになるまで

大学生の頃だったか、大学を卒業して学校ではたらくようになった頃だったか、母親に「あなたの子育てで失敗だったのは、本を読む子にできなかったことだ」と言われました。そう言われても深く考えずに、まあ特に問題もなく、手のかからない子だったってことかなと思っていたし、そう言われて奮起して、「本を読む子になってやる！」なんてまったく思いもしませんでした（だいたい、よくよく考えると、両親共に読書の習慣がなく、家にあるのは名作全集みたいな厚みのある本だけだったので、子どもが本を読むようになるわけないんです…）。

小学生から高校生の間は、図書館に行くことはほとんどなく、宿題の読書感想文を書くために本を読む、という状態でした。大学に電車を通うことになっていたら、通学時間を持て余して本を読み始めたかも知れませんが、そうはならず…。そんな”不運”もあり、大学を卒業するまで必要最小限の本しか読まずに過ごしてしまいました。働くようになってからも、授業に関する本や学校での仕事に関する本をほんのちょっぴり読む程度でした。しかし、こんな私でも、本を読んでみようと思うようになったのはどうしてだったか、この『BookTalk』を書くに当たって思い返してみると、

①同じ教科の年配の先生が、〇〇〇オフにたびたび行っは様々なジャンルの本を買って読んでいるということを聞いて、中古本を買ってまで本を読むなんてスゴいな～と思った。〔25歳の頃〕

②まわりの先生方（特に、仕事ができる先生や話題や知識が豊富な先生）が本を読んでいたたり、本の話をしているのを目にして憧れ、いつか真似したいと思った。〔26～28歳の頃〕

③クラス担任の仕事に関する本に「学級文庫をつくる」というのが載っていて、教室に自分で買った本を置くななんてスゴイ！と思ったが、本を読まない私には置く本はなく、そういうのを実行している先生も身近にはおらず、そのうち本を読むようになったら…という将来的な展望ができる。〔29歳の頃〕

④教室に学級文庫をつくっている先生が転任してこられて、私も！という気になり、学級文庫をつくるために本を読むようになる。〔30歳の頃〕

というような流れがありました。そういえば。

最初はどんな本を読んだらいいかな？と考えたのですが、中高校生の頃に読むべきだった本を読まずに過ごして来ただけだし、読んだ本は教室に置くのだし、中高生向けの本を読むことにしました。「〇〇文庫の100冊」「発見！〇〇文庫の夏」といったキャンペーン冊子の本の紹介文に興味を持てた本からスタート。本を読むのが楽しくなってからは、学級文庫の本を増やしたいこともあり、どんどん読みました。生徒と本の話で盛り上がりえるようにもなりました。

好きなのはスポーツもの、推理小説、ほのぼの系。よく読むのは東野圭吾、有川浩、湊かなえです。『阪急電車』を読んで好きになった有川浩は、ミリタリー系、恋愛系、それ以外、どの作品も読んだ後は爽快です。自衛隊員の恋模様を描いた『ラブコメ今昔』ももちろん、ベタ甘ながら爽快です。『武士道シックスティーン』



（菅田哲也）は、主人公である剣道部の女の子2人の掛け合



いがおもしろくて、剣道をまったく知らなくても引き込まれます。『獣の奏者』（上橋菜穂子）は生徒に勧められて読んだ本。アニメ化もされた、ファンタジーながら壮大な物語です。『浜村渚の計算ノート』（青柳碧人）は、数学好きな中学生・浜村渚が、数学を使って事件を解決していきます。数学嫌いな人でも楽しめます。『ツナグ』（辻村深月）は、一生に一度だけ死者との再会することができるなら…という設定で、様々な人物の思いが描かれています。

もともと料理や食に興味があったので、それに関する本もよく読みます。おもしろかったのは、エッセイでは平松洋子の『買えない味』『サンドウィッチは銀座で』など多数、角田光代『今日もごちそうさまでした』、西加奈子の『ごはんぐるり』、そして『おやつ』や『するする、ラーメン』といったアンソロジー。料理が登場する小説では、柚木麻子の『あまからカルテット』、藤野恵美の『初恋料理教室』、近藤史恵の『タルトタタンの夢』です。

まだまだ難しい本には手が出ないのですが、近頃ようやく小説でもエッセイでもない、ビジネス書や自己啓発本を読むようになりました。印象に残っているのは『嫌われる勇気』（岸見一郎、古賀史健）です。フロイト、ユングと並び「心理学の三大巨頭」と称される、アルフレッド・アドラーの思想（アドラー心理学）を基に、私たちが日頃抱えている人間関係の悩みをシンプルに解決し、“嫌われる勇気”を持ちながら自分らしく生きるための方法を、「青年と哲人の対話篇」という物語形式を用いてまとめた一冊。人間関係に悩んでいない人でも楽しめる内容です。

今では初心者ながら、「趣味：読書」と書けるようになったわけですが、高校生の頃からでも本を読んでいたれば人生が違っていただかも知れないな～と思います（今の人生に不満があるわけではないですが）。最近読んだ『明日の子供たち』（有川浩）で、こんなやりとりがありました。

『俺、小さい頃、本を読むのは物知りになれるから素敵なんだと思ってた』
「そうね。それも素敵なことよ」
『今は、いろんな価値観を知ることができるから素敵なのかなって』
「そうね。それもきっと」
『正解って、何だったの？』



「どれが正解っていうのはないのよ、きっと」「本を読んでもよかった、と思うことがあったら、それが全部正解なの」「人生は一人に一つずつだけど、本を読んだら自分以外の人の人生が疑似体験できるでしょう。物語の本でも、ドキュメンタリーでも。そうやって他人の人生を読んで経験することが、自分の人生の訓練になってることがあるんじゃないかって、先生は思うのよ。踏み外しそうなときに、本で読んだ言葉が助けてくれたりとか…」「本を読むと、自然に想像力が培われるんじゃないかと思うのよ」

『どんな本を読むのがいいのかな』

「きっと、何でもいいのよ。楽しく読んだものは、全部自分の糧になるわ」

本を読むようになってようやく、本を読む意義を考えるようになったのですが、この部分に深く共感しました。人生が変わるかどうかは分かりませんが、よりよい人生を歩むためにも、本を読みましょ。ぜひ！（理科・南 理絵）